



＊ 研究会報告 ＊

第 45 回 『中国・朝鮮の旧日本租界』 研究会

中国・朝鮮の旧日本租界

日時：2014 年 7 月 18 日（金）15:00～17:30

場所：神奈川大学横浜キャンパス 21 号館 405 会議室

報告：田島 奈都子（青梅市立美術館 学芸員）

陳 雲蓮（英国ケンブリッジ大学ウルフソンカレッジ リサーチフェロー）

「中国民国期の商業ポスターの実態
—中国語表記のポスターは果たして 100%中国製
なのか?!—」

（田島奈都子）

1. はじめに：研究の発端

現在、民国期に製作された、中国服を着た人物を主題とした中国語表記の商業ポスターは、一般的に「中国製」と思われている。しかし、日本郵船や英米煙草は外国企業でありながら、上記の特徴を備えたポスターを製作しており、中国を代表する煙草会社である南洋兄弟煙草公司（以下、南洋煙草）のポスターは、立証できる作品は一部であるものの、大阪の日本精版印刷株式会社（以下、精版印刷会社）によって製作されたことが明らかになっている。要するに、上述の特徴を備えたポスターは、100%「中国製」とは限らないのである。

2. 日本の製版印刷業者にとっての中国

1910 年代半ば以降の日本企業は、第一次世界大戦の好景気を追い風として、本格的に中国に進出する傾向が強まり、それに同調するかのように、日本の製版印刷会社も中国を「新たな印刷市場」と見なし、関心を強めていった。実際、その様子は当時発行されていた印刷業界誌に、頻繁に中国に関する記事が掲載されたり、日本企業が依頼主となった中国語表記のポスターが現存していたり、日本の各製版印刷会社が製品やその見本として、「中国（語圏）向け」のポスター図案を発表したり、日本国内において「中国ポスター展」が各地で開催されていたことからよくわかる。

3. 精版印刷会社の中国での営業実態

大阪を本拠地とする精版印刷会社は、1907 年頃に南洋煙草と知遇を得て以来、上海への進出を加速させ、1929 年に発行された『精版印刷会社ノ概況』によると、同社の中国における取引先には、南洋煙草を筆頭とする中国各地の煙草会社に加え、中国に進出した欧米企業が多数含まれ、収益の 5 分の 2 は中国で上げていた。

精版印刷の強みは、ポスターに代表される高級な平版印刷を美麗に仕上げられる点にあり、それを支えていたのは、最新の機械を導入した広大な上海工場に加え、1916 年に同社が実施した「第 2 回広告画図案懸賞募集」において、上海出身の周柏生を 3 等 1 席の入賞者として迎えられたことであった。なぜなら、中国における需要に的確に応えていくためには、「中国（語圏）向け」ポスターを専門に描ける中国人図案家が必要不可欠であり、実際、周は懸賞入選後に南洋煙草のポスターを筆頭に、数多くの中国国内外の企業のポスターを手がけ、その製版印刷を請け負っていたのが精版印刷会社であったことを考えると、両者は懸賞募集を契機に持ちつ持たれつの関係になったと推察される。

また、精版印刷会社は 1910 年代後半に中国政府の要請を受けるかたちで、中国人研修生を大阪工場に受け入れ、最新の製版印刷術の技術習得につとめており、1920 年代後半の同社上海工場で働いていた職員の 6 分の 5 は中国人であったとのことであるから、同社で技術や知識を身につけた中国人もかなりの数に上ったと思われる。

4. 結論

民国期に製作された、中国服を着た人物を主題とする中国語表記の商業ポスターが、「中国（語圏）向け」に製作されたものであることは確かである。しかし、これ

まで紹介したいいくつかの事例を総合すると、上記2点の特徴だけで100%「中国製」とするのは早計であろうし、表面に現れているか否かに拘わらず、中国のポスターの発達を考える際には、同時代の日本の製版印刷業者の存在や彼らの手がけた作品についても、合わせて考慮すべきと思われる。

戦前期の外国における日本の製版印刷業の活動実態については未解明の部分が多く、今後は現地の研究者の協力も得ながら調査研究を進めると共に、同時期に製作された日本と中国のポスターを見比べることで、デザイン的な相違や影響関係についても考察を深めていきたいと考えている。

集落から都市へ：近代上海の都市形成原理

(陳雲蓮)

本報告は、陳雲蓮による近代上海の都市形成史研究の新しい成果の一部に基づき行われたものである。

従来、上海の外国租界となった地区は、沼地、低湿地、墓地という通説が定着しているが、それは租界当局、様々なメディアと先行研究が、1843年上海開港以前の同地区の空間特性、及びその中で営まれていた中国人の生活実態を詳しくかつ丁寧に検証していないことから生じた誤解である。

上海外国租界の都市形成について都市・建築史学の立場から改めて考えるため、筆者は主にイギリス陸軍省作成の1840年代から1940年代までの上海と江南地域の実測調査地図集、19世紀半ばに、上海、浙江省、江蘇省等で植物探検をしていたイギリス人の植物学者や、中国の貿易港(広東、廈門、福州、上海、寧波)に赴任してきた領事官たちの記録により、上海と江南地域に存在していた水路と集落の実態、及び長年の中国人農耕社会を支えた汚物再利用のシステムとその意義について分析した。その上で、1843年以降、イギリス人が主導した上海租界の道路、土地と下水道整備の過程を究明し、旧来の水路と集落が近代の都市開発の中で果たした役割を明らかにした。要約すると下記の三点となる。

第一に、清末時代から続いた上海県城と周辺、及び外国租界となった地域の水路は、本来の清朝政府官僚または民間人により整備されたものが多く、農業灌漑、漁業、交通の機能を持っていたことが明らかとなった。更に、小さな水路は必ず大きな蘇州河や黄浦江へと通じる傾向

にあったため、それら水路の流れや河底の土堆積などはすべて黄浦江の流れや潮に左右された。水路の流れや潮は後にイギリス人が整備した「潮力下水道」の決定的な要素となった。

一方、旧来の汚物処理方法に関し、地方官僚や地主の出資で中国人はヨーロッパ人が「無駄」と思われた住民の糞尿と生ゴミすべてを拾い、タウンから発する特定の地上水路又は排水路を経由させ、郊外の農地近くに収集し、肥料として加工した後、一番高い値段を提示する集落に販売する。しかし、水路、集落と汚物処理の社会システムが、1840年代からのイギリス人主導の近代都市開発により、実質上の解体の運命を迎えた。

第二に、道路と土地整備に関し、イギリス人は全体的な計画図もなく、旧来の中国人集落に存在していた水路、フットパスを足がかりに、水路を埋め立て、水路沿いのフットパスと一緒に租界の新道路に充てた結果、上海イギリス租界の主要街路網は、旧来の水路網を吸収して出来上がった。既存の水路網をそのまま近代都市の道路として整備した事実は、近代都市の形成原理及び都市拡張の根本的な要因であったことを意味する。一方、イギリス人商人は公道が整備される以前に、水路やフットパス沿いの土地をまず中国人地主から借り上げ、土地開発を行った。それが原因で、初期イギリス租界の道路交通状況が常に混雑を極め、道路整備が土地開発を後追いする形で行われた。

第三に、下水道整備に関し、イギリス人は旧来の中国人によるゴミと汚物処理方法をまったく学習しないまま、イギリス国内の下水道システムを導入した。黄浦江、蘇州河と洋涇浜が海に通じているため、河に繋がる潮力排水管を道路の下に埋設し、潮力で排水管内の汚物を排出し、そのまま河に放流しようと工部局は意図した。しかし、潮力はあくまでも気まぐれな自然要素であり、租界内の汚物を全部海まで流すことが出来ず、結局、中国人労働者が雇われ河岸に堆積したゴミや汚物を清掃することになった。一方、予想外の強い高潮の場合は、地中に埋まっていた排水管が破裂し、道路が陥没したケースもみられた。下水道の欠陥が後の都市衛生問題にまで発展した。

以上のことから、今日の大都市上海の基盤となる上海租界が、旧来の水路、集落を基礎として発展したことを実証的に証明することができた。上海はまさに水路と街路が複層化した都市なのである。